The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ロシア語接辞の頻度をめぐって
Author(s)	上原，順一
Citation	外国語教育のフロンティア．2025，8，p．79-86
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/100885
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ロシア語接辞の頻度をめぐって

On the Frequency of Russian Suffixes

上原　順一

Abstract

This paper examines the relationship between regularity and text frequency in Russian word formation, with a particular focus on the suffixation system. Using data from the Russian National Corpus (RNC), the study analyzes high-frequency derivatives formed by several suffixes, focusing on deverbal nouns denoting actions and agent nouns.

The findings reveal that derivatives formed with regular suffixes do not necessarily appear frequently in texts. For instance, while -ние forms many deverbal nouns (high type frequency), some derivatives with less regular suffixes like борьба 'struggle' show high token frequency. The study suggests that high-frequency derivatives formed by irregular patterns may function more as individual lexical items rather than as products of word formation.

The research also demonstrates how text frequency can help differentiate between homonymous suffixes: while both agentive and instrumental -тель are considered regular in word formation, their derivatives show significantly different frequency patterns in actual texts.

Keywords: Russian word formation, suffixation, frequency

1.「生産性」の概念をめぐって

現代ロシア語においては、多くの語彙が語形成によってなりたっており、語形成の手段でもっとも多く見られるのが接辞の付加である。エフレーモワの語形成辞典は、動詞、形容詞、名詞、副詞を形成する接辞の数は 1875 であると記載している（Ефремова 1996: 9）。接辞付加の記述は、通常、基体語、接辞、派生語、語形成上の意味をまとめた語形成のタイプないしはモデルによって行われる。

拙文では、語形成のタイプがロシア語の言語体系でどのように広く使われているかという点について、先行研究をまとめながら接辞の生産性などの概念を整理する。次に実際の文章において使われる頻度について研究方法を述べ、成果の一例を吟味する。

接辞が広く使われる現象は、ことなったいくつかの側面でとらえられる。第一の側面は、新しい語を生み出す可能性である。これはしばしば「生産性」という概念で説明される。ゼムスカヤは、「ある時代の言語において、新しい語、語形、統語構造を作り出す際の見本となるようなタイプ（モデル、構造）を生産的と呼ぶ」（Земская 1973: 208）と記し、語形成における生産性の概念を認めている。『ロシア文法』は、「タイプの生産性とは、語を生み出すモデルとして機能する能力である。現代標準語において新しい語が形成されるタイプは生産的であり、そのタイプに属する語の系列は開放的である」（Русская Грамматика 1980: 135）と説明している。この生産性については量的

概念、つまり生産性が大きい（または小さい）語形成タイプや接辞が設定しにくいと言われている。たとえば、ポチハは「低生産的なモデルと生産的なモデルの間に正確な境界線を引くことを可能にする明確で厳密な基準が、今日まで存在しないからである」（Потиха 1970: 74-75）と述べている。同様に、ゼムスカヤは「高生産的、中生産的、低生産的なタイプが区別される。このような試みはしばしば主観的なものとなる。なぜなら、生産性の程度を確定する基準がまだ作られていないからである」（Земская 1973: 210）と考えている。

この考え方を継承すれば、生産性は量的概念ではなく、むしろ質的概念であると考えられる。これに言及しているのはクブリャコーワである。彼女は上述の「生産性」を「活動性」と表現してはいるが、「モデルの活動性とはむしろ質的特徴である。なぜならそれは語形成が新しい単位を追加する能力を意味するからである」（Кубрякова 1965: 21）と述べている。

第二の側面は、ある語形成タイプで作られた派生語の数に注目する概念であり、「規則性」と呼ばれている。この点は、ポチハの述べるように「言語において繰り返され、一定の語形成または語形形成のタイプを形成する接辞が規則的と呼ばれる」（Потиха 1970: 74-75）とまとめられよう。クブリャコーワは「規則性」ではなく「生産性」と表現するが、それについて、「モデルの生産性とはむしろ語形成の数量的特徴である：そのモデルによって言語に数十、時には数百もの派生語が作られている場合、そのモデルは生産的である」（Кубрякова 1965: 21）と記している。

ここまでに述べた「生産性」と「規則性」は異なる概念である。これをよく示すのが、片方の指標だけが大きい例である。ビノクールは「ходить 歩く — ходьба 歩行、косить 刈り取る — косьба 草刈り、бороться 戦う — борьба 戦いなどの関係に見られる語形成のタイプは、生産的ではないが、規則的である」（Винокур 1959: 1437）と記して、動詞から接尾辞 -ба により動作名詞を派生するタイプを示している。同じようなタイプとして、エフレーモワは -ик（а）によってベリー、イチゴ類を表す語をつくるものについて、「十分に規則的だが、生産的ではない（植物の俗称においてのみ広く見られる）」（Ефремова 1996: 183）と記述している（語例としては чёрный「黒い」—「черника」コケモモなどが該当する）。

しかし、ある語形成タイプの派生語が多いことが語の多用に直結するわけではない。たとえば、よく使われる接辞を含む語が必ずしも高頻度ではないであろうし、あまり使われない接辞をもつ語が低頻度であるとも限らない。テキストにおける頻度についてロシア語の語形成関連の先行研究では議論があまり活発ではないように思える。テキスト分析によって、特定の形式を抽出することは技術的には比較的容易である。ただ、それらについて語形成の意味を勘案するとなると作業は煩雑になることが想定される。ある程度大きな語数、テキストの分量の効率的な分析が依然として困難であることがその理由かもしれない。テキストにおける利用頻度についてはクブリャコーワ（Кубрякова 1965: 21）、Кузнецова А. И., Лавренова О. А.（1975）などが参考になろう。次に述べるのは、語形成のタイプと派生語の利用頻度についての実例である。

2. 規則性とテキスト頻度

語形成のタイプには規則的なもの（多数の語を派生するもの）と不規則なもの（派生語が少数のもの）がある。これについて調査してみよう。ここでは、Национальный корпус русского языка（Russian National Corpus）（以下、“コーパス”と呼ぶ）を利用した。このコーパスは token が 20 億以上であり、言語の量的な調査を行うには十分大規模なものであると考えられる。検索できる意味もかなりの程度 充実している。今回は調査対象を高頻度の語に限った。ここでいう頻度は次のように考えた。「コーパス」が検索結果（lemma など）に付記している ipm という指標がある。これは「すべての語形の出現数をコーパスサイズで割り、100 万を掛けた値」とされている。これにもとづいて頻度の目安が下のように示されている（このあたりは「コーパス」の “Портрет слова”, “Word at a glance” の説明を参照）。

10000 超
частотность высокая, слово очень распространенное
high frequency, the word is very common

1000..10000
частотность довольно высокая, слово распространенное
quite high frequency, the word is common

100..1000
частотность скорее высокая
rather high frequency

10..100
частотность скорее низкая
rather low frequency

1..10
частотность довольно низкая, слово редкое
rather low frequency, the word is rare

1 未満
частотность низкая, слово очень редкое
the word is very rare

ここでは「高頻度」を 100 以上の ipm を示す語を調査の対象にした。

まず、動詞から派生する名詞（とくに動作「… すること」を表す語、動作名詞）について述べる。このタイプの接辞として -ние, -ба, -ка をとりあげる。検索には任意の文字列を示すアステリスク * を利用できる。”*ние” などと入力した検索結果を lemma ご

とにまとめる。その結果より高頻度語を抽出した結果を示す。基体語、日本語は筆者が付記した。

-ие 名詞：
基体語、基体語の日本語、派生語、その日本語 , ipm
двигать, 動く，движение, 運動・動き，268.96
решать, 解決する，решение, 解決・決定，236.47
течь, 流れる，течение, 流れ，178.59
желать, 望む，желание, 願望・希望，164.81
управлять, 管理する，управление, 管理・運営，159.51
выражать, 表現する，выражение, 表現・表明，146.67
основать, 基礎をつくる，основание, 基礎，145.29
являться, 現れる，явление, 現象・出現，144.05
собирать, 集める，собрание, 集会・収集，142.25
влиять, 影響する，влияние, 影響，137.01
содержать, 含む，содержание, 内容・含有，134.71
представлять, 提示する・表現する，представление, 表現・上演，133.76
образовать, 形成する，образование, 教育・形成，133.44
знать, 知る，знание, 知識，131.67
исследовать, 研究する，исследование, 研究・調査，130.42
производить, 製造する，произведение, 作品・製作，120.66
предложить, 提案する，предложение, 提案・申し出，117.87
создать, 創造する，создание, 創造・創作，116.10
требовать, 要求する，требование, 要求・要請，114.05
изменить, 変える，изменение, 変化・変更，107.63
существовать, 存在する，существование, 存在，106.51

高頻度語には、отношение「関係」，положение「位置・状態」，внимание「注意」，состояние「状態」，мнение「意見」，значение「意味」，сознание「意識」，направление「方向」，впечатление「印象」，население「人口」，название「名称」，здание「建物」，зрение「視覚」，настроение「気分」があったが、動詞との関連性が小さいと考えられるので、除外した。

-ба 名詞：
基体語、基体語の日本語、派生語、その日本語 , ipm
бороться, 戦う・闘う，борьба, 戦い・闘争，205.54
служить, 勤める・仕える，служба, 勤務・奉仕，203.66
（судьба は除外した）

-ка 名詞：

基体語、基体語の日本語、派生語、その日本語 , ipm
улыбаться, 微笑む，улыбка, 微笑み・微笑むこと，116.32

まとめると、-ние 名詞が 19 語、-ба 名詞が 2 語、-ка 名詞が 1 語 であり、規則性がもっとも高いのが 接尾辞 -ние であると言える。一方、派生語が少なく規則性が低いタイプでも、実際の文章で頻繁に利用されていると考えられる語が борьба「戦い・闘争」、служба「勤務・奉仕」、улыбка「微笑み・微笑むこと」である。

あとひとつ事例をみよう。それは動詞から接辞付加で派生する動作主名詞「… する人」を表す語形成タイプで、ここでは -тель と -льник を調べた。

-тель 名詞
基体語、基体語の日本語、派生語、その日本語 , ipm
писать, 書く，писатель, 作家・著述家，182.92
представлять, 代表する・紹介する，представитель, 代表者・代理人，134.06
учить, 教える，учитель, 教師，129.25
родить, 産む，родитель, 親・父母，125.42
читать, 読む，читатель, 読者，116.21
жить, 住む・生きる，житель, 住人・居住者，113.60
председать, 議長を務める，председатель, 議長・委員長，113.04

-льник 名詞
基体語、基体語の日本語、派生語、その日本語 , ipm
начать, 始める，начальник, 長・上司，207.12

この 2 つのタイプでは、-тель 名詞 が 7 語、-льник 名詞 が 1 語であり、前者の派生語が多い、つまり規則性が高い。一方で、テキスト頻度は начальник,「長・上司」は決して小さくないことがわかる。ここでみた規則性とテキスト頻度について次に述べる。

3. テキスト頻度と語形成

規則性の高い語形成タイプはそれに属する語が多い。これは規則性の高いタイプは type 頻度が大きいと換言できる。規則性の低い語形成タイプは type 頻度が小さいと言える。一方で、頻度の高い語は token 頻度 が大きく、小さい語の頻度は token 頻度が小さいと言える。両者を区別する考え方は Bybee（1985, 1995）などに見られている。いわゆる英語の語形変化について、Bybee は「英語の規則動詞と不規則動詞の分布に関する重要な事実は、不規則動詞は全体のごく一部を占めるに過ぎず、そのほとんどは token 使用頻度が非常に高いということである。規則変化の動詞は type 頻度が圧倒的に高い」（Bybee 1995: 426）と記している。

上で述べた ロシア語の動作名詞と動作主名詞をふりかえろう。type 頻度の大きい語形成 -ие 名詞 と -тель 名詞 以外の 語形成 に属する少数の語は、「圧倒的」とは言えないかもしれないが、token 頻度が高い。この状況は Bybee が述べている英語の規則動詞、

不規則動詞の状況によく似ている。そして、「個々の使用頻度（token frequency）が高い形式は、機械的に学習でき、自律的になることができ、それは同じパラダイムの他のメンバーからも独立している」（Bybee 1995: 433-434）というのであれば、不規則なタイプに属する борьба「戦い・闘争」、служба「勤務・奉仕」、улыбка「微笑み・微笑むこと」、начальник「長・上司」などは、語形成というよりは、個別の語彙として機能していると考えられる。

また、極端に type 頻度が小さい語形成タイプもある。たとえば、словарь「辞書」は слово「語、単語」から派生していると考えられる。このタイプの語形成はこれ以外には буква「文字」— букварь「文字の絵本」、стихи「詩歌」— стихирарь「聖詠集」のみである（Ефремова 1996: 58）。слово 以外はここでいう高頻度の語ではない。しかし、いうまでもなく словарь「辞書」はロシア語学習では必要な語のひとつであり、いわゆる第 1 レベル（CERF B1 に相当）の語彙集にも収録されている（Андрюшина Н.П. и др. 2014: 168, 175）。この点を考慮すれば、この語形成は слово「語、単語」— словарь「辞書」のひとつだけということになる。このタイプは極端に不規則な語形成であるといえるし、type 頻度も属する語の token 頻度も小さいので、словарь「辞書」は個別的な現象といえよう。似たような現象としては почта「郵便」— почтамт「中央郵便局」もある。-амт で終わる派生語は見当たらないだろう。これも語形成論では扱いにくい問題であると考えられる（そもそも限られた語にしか観察されない -арь, -амт などの形式が形態素かどうかという問題もある。これについてはシードロワの論文（Сидорова 2011）が参考になる）。

さらに、テキスト頻度をもちいて、いわゆる同音意義的な現象を区別することができる。これは、同一の形式をもちながらも意味が異なる語形成のことである。上で触れた動詞から派生する -тель 名詞は動作主であったが、同じ形の接尾辞が「道具」を意味する名詞を作ることがある。両者ともエフレーモワの語形成辞典では規則的と記述されている（Ефремова 1996: 457-458）。しかし、文章で利用される度合いが異なる。「コーパス」で “*тель” に加えて、”инструменты и приспособления”「道具と設備」という意味を指定した上で検索すると次の結果を得た（ipm の大きいものから上位 10 語のみを記す）。

基体語、基体語の日本語、派生語、その日本語 , ipm
двигать, 動かす，двигатель, エンジン，40.44
указать, 指し示す，указатель, 指示器，5.45
выключать, 切る，выключатель, スイッチ，3.79
усилить, 強める，усилитель, アンプ，3.60
преобразовать, 変換する，преобразователь, 変換器，2.88
ускорить, 加速する，ускоритель, 加速器，2.61
предохранить, 保護する，предохранитель, 安全装置，2.42
переключать, 切り替える，переключатель, スイッチ，2.09
проигрывать, 再生する，проигрыватель, プレーヤー，1.79
распределить, 分配する，распределитель, 分配器，1.55

-тель 名詞 の「動作主」と「道具」とでは、両者とも規則的とされて派生語の数自体は多いとみなされているが、前者には高頻度で用いられる派生語が多いのに対して、後者はそうではない。

4. おわりに

語が他の語からできていると考えられる現象が語形成であり、語形成の多くが接辞付加である。一方で他の語からできていない語（非派生語）は語形成ではなく狭義の語彙体系の現象と言える。接辞付加はいかにも語形成らしいパターンであるが、非派生語はそうではなく、身近な表現をもちいれば「辞書で決まっている」といえよう。語形成タイプの規則性がある程度みとめられ、それに属する派生語のテキスト頻度もある程度大きければ、それらの語は「いかにも語形成らしい」と「辞書で決まっている」のあいだに存在すると認識されるかもしれない。それとはことなり、規則性がある程度あってもテキスト頻度が小さければ、ロシア語運用でそもそも出くわさない語が多く、「辞書で決まっている」とみなされて辞書によって語義をしらべることになろう。派生語の意味領域によっては（たとえば、-ик(а) によりベリー、いちご類を意味する語をつくる語形成タイプや -ин(а) で食肉類を表す語をつくるタイプ баран「羊」— баранина「羊肉」、свинья「豚」— свинина「豚肉」など）は規則的であるとみなされていても、学習者などがロシア語の生活圏にいなければ遭遇する語のテキスト頻度が小さく、派生を認識しにくく感じられるだろうが、これは非言語的な要因として別に調査が必要な課題であると思われる。

参考文献・資料

Андрюшина Н.П. и др.

2014 *Лексический минимум по русскому языку как иностранному. Первый сертификационный уровень. Общее владение / (электронное издание)*. — 7-е изд. — СПб., Златоуст.

Винокур Г.О.

1959 *Заметки по русскому словообразованию*. Издательство АН СССР.

Ефремова Т.Ф.

1996 *Толковый словарь словообразовательных единиц русского языка*. Русский язык.

Земская Е.А.

1973 *Современный русский язык. Словообразование*. Просвещение.

Кубрякова Е.С.

1965 *Что такое словообразование*. Наука.

Кубрякова Е.С.

1974 *Основы морфологического анализа*. М. Наука.

Кузнецова А. И., Лавренова О. А.

1975 “О существовании корреляции между продуктивностью и употребительностью аффиксов в русском языке” // *Исследования по структурной и прикладной*

лингвистике. М., 1975. С. 83–99

Потиха З.А.

1970　*Современное русское словообразование*. Просвещение.

Русская грамматика

1980　Н. Ю. Шведова (гл. ред.). — М.: Наука — Т. 1: Фонетика. Фонология. Ударение. Интонация. Словообразование. Морфология.

Сидорова Т.А.

2011　“Традиционная проблема членимости в когнитивном аспекте”. *Вопросы когнитивной лингвистики*.1.

インターネット上の資料

Национальный корпус русского языка (Russian National Corpus)
https://ruscorpora.ru/
2024 年 10 月 31 日 閲覧